律詩　―訓読―

春望

杜甫

国破れて　山河在り
城春にして　草木深し
時に感じては　花にも涙を濺ぎ
別れを恨んでは　鳥にも心を驚かす
烽火　三月に連なり
家書　万金に抵たる
白頭　掻けば更に短く
渾て簪に勝へざらんと欲す

八月十五日夜、禁中独直、対レ月憶ニ元九一

白居易

銀台　金闕　夕べ沈沈
独り宿し　相思ひて　翰林に在り
三五夜中　新月の色
二千里外　故人の心
渚宮の東面　煙波冷ややかに
浴殿の西頭　鐘漏深し
猶ほ恐る　清光　同じくは見ざるを
江陵は卑湿にして　秋陰足る